

研究ノート

天津の文化、及びその背景を知るための 基礎的研究 (1)

A Study Note for Understand The Culture and Its Background of Tianjin(1)

後藤岩奈*

GOTO Iwana

1 はじめに

本稿は、天津の文化、及びその背景を知るための基礎的研究として、朱其華主編、劉永沢副主編『天津全書』（天津人民出版社、1991年、以下『全書』と略記する）より、天津の歴史について記述された箇所を翻訳したものである。この『全書』は、『天津全書』編纂委員会によって天津紹介のために刊行されたもので、その「前言」では、「国内外の天津へのさらにいっそうの認識と理解の需要に応じるために、本書はできる限り全方位に、多面的に、立体的に天津の過去と現在を紹介する。（中略）本書は現在収集可能な各種資料と統計数字に基づいて、できる限り全面的に、正確に天津の全貌を紹介する」と述べている。¹「総況」「政治」「社会生活」「城市建设」「経済」など23の章から成り、そのうち「総況」の「8、天津歴史簡述」「9、天津人民的革命闘争」「10、天津的解放」「11、天津解放後の重大事件」に天津の歴史に関する記述がある。本稿では、これらの章節より、天津の陸地化から1890年代の洋務運動までの時期に関する九つの項目を選び、年代順になるように配列し、訳出した。

次に、そもそもどうして「天津」を扱うのか、について述べてみる。その理由は、ごく私的なことであるが、筆者が1990年9月から1993年7月まで、天津の南開大学中文系に留学したことによる。筆者は初めからこの大学を希望していた訳ではなく、北京の大学を希望していたが、中国政府奨学金の公費留学であったため、中国政府の「分配」によってこの大学に決まった。特に望んで訪れた街ではなかったが、三年間の滞在で、自分はこの天津という地において、客観的には在華外国人であったが、少なくともこの三年間は天津人であった、

* 新潟県立大学国際地域学部 (iwana@unii.ac.jp)

天津の一構成要素であったという思いがある。そして自分が今存在するこの土地、この街が、いったいどのような経過を経て現在のような状態に至ったのか、自分は今、どのような流れの中に身を置いているのかを無性に知りたくなった。またその流れを形成する諸要素を明らかにしたいと思うようになった。そしてさらに筆者は中国近現代文学を専門としており、天津の歴史、社会、人々の生活の中から生まれた文学作品を鑑賞するためにも、歴史を知っておきたいと思った。

天津の歴史に関する文献としては、中国で出版されたものに、天津社会科学院歴史研究所《天津簡史》編写組編著『天津簡史』（天津人民出版社、1987年、以下『簡史』と略記する。）があるが、筆者が敢えて『全書』の記述を翻訳しようと考えた理由について述べてみる。理由としては、一つには『簡史』は記述が詳細で分量が多く、『全書』の記述内容は『簡史』の内容を簡略したものであり、また「事件史」のような形となっており、天津史上どんな出来事があったのかを手っ取り早く知ることができる。しかしそのことは反面、ある事件と次の時期の事件とのつながり、歴史発展の因果関係、歴史的条件等が十分に述べられていないとも言える。二つ目に、『簡史』は、扱われている内容が1949年の新中国成立、天津解放までであるが、『全書』の記述は1976年の「文化大革命」の終結までである。できるだけ同時代、現在につながる事実を知りたいと思っていたので、『全書』を翻訳することにした。このほか、日本で出版されたものに、天津地域史研究会編『天津史 再生する都市のトポロジー』（東方書店、1999年、以下『天津史』と略記する）、吉澤誠一著『天津の近代 清末都市における政治文化と社会統合』（名古屋大学出版会、2002年、以下『近代』と略記する）がある。両書とも、扱われている内容は近代以降に重点が置かれている。『全書』の記述訳出にあたり、これら三種の文献の内容も参照した。

以下、2章から10章において、『全書』の該当箇所の翻訳を掲載し、11章において、他の文献を参照して気づいた点を挙げてみる。なお原文には「注」は付されておらず、訳文中の〔〕による訳注、および全章の文中の注は、いずれも筆者（後藤）が付したものである。

2 天津の陸地化および早期の集落²

今から10万年から15000年前、地球全体は地質学上、極めて寒冷な気候の大氷河期³にあった。渤海地区はまさに一面の凍土地帯で、黄河と日本海もわ

ずかな細い川の流に過ぎなかった。今からおよそ15000年前、地球は大理氷河期の末期に入り、気候は次第に温暖となり、大陸氷河も徐々に融け始め、海洋も水面が上昇し、完新世海進が出現した。現在の渤海湾西岸、南は河北省黄驊県から、北は天津市宝坻県まで、西は保定地区の白洋淀付近まで、すなわち今日の天津平原の広大な地区が海水に覆われており、渤海の一部となっていた。これが地質学上「天津海進」と呼ばれるものである。今からおよそ6000年ほど前、海水は渤海の方向に向かって後退し始め、地表に、相当に厚い一層の海底堆積物を残した。のちに黄河河口の三度の北への移動が加わり、現在の天津付近に至って海に注ぎ、大量の土砂をもたらして、河口の周囲に沖積して河にたまり、絶えず往復振動し、海底堆積物の表面に大面積の沖積扇が現れ、次第に積もって平坦な土地を成し、同時に海岸線を徐々に東へと押しやって、今日の天津平原を形成した。

黄河の最初の北流は、今から3000年前の商周期、河口地点は現在の渤海湾西岸の北部で、現在の天津市区東北部と寧河県との狭く長い窪地は、古黄河河口部分の跡である。その後、西漢元封二年（西暦前109年）から新（莽）の始建国三年（西暦11年）、黄河の河口はさらに漢章武県南にまで移動し、現在の河北省黄驊県と塩山県の間には、現在もなお、古黄河河床の跡が残っている。北宋慶歴八年（1048年）から金明昌五年（1194年）までに、黄河はさらに河道を変え、現在の天津市南郊区泥沽郷付近で海に注いだ。黄河が移動して離れる毎に、その一帯の海辺の海水は、混濁した淡水が流入することがなくなったために、そこに貝類が大量に繁殖し、貝殻が海潮によって沖積し、海岸上に堆積して貝殻堤を形成し、天津平原陸地化の歴史的遺跡を残した。

天津市区から現代の海岸線まで、少なくとも三本の顕著な貝殻堤がある。

第一の線は、北の部分は天津市東南部の田庄から始まり、大王庄、巨葛庄、南八里台、中塘村の線である。中間の部分は三本に分かれ、西の支線は大蘇庄、小劉庄を経て竇庄に至る。中間の支線は坡庄を経て友愛庄に至る。東の支線は沙井子にまで至る。南の部分は王肖庄、閻家房子、武帝台、劉西庄を経て断続的に連なる線である。この堤の生成年代は、今から3800年から3000年前、殷商時代の海岸線である。

第二の線は、北端は寧河小北澗沽に始まり、蘆台と東郊の白沙嶺を経て、さらに軍糧城、泥沽、鄧岑子、上古林、老馬棚口を経て、黄驊県の岐口、賈家堡、狼坨子に至り、時間的には春秋時代の中期から唐代までの海岸線である。

第三の線は、北端は漢沽区鯉頭沽に始まり、南に向かって北塘、新河、塘沽、高沙嶺、唐家河、老馬棚口を経て、岐口から南に向かって第二の線と重複する。

この貝殻堤は現代の海岸線から最も近く、走行も基本的に一致しており、金明昌五年（1194年）に黄河が天津を離れ、奪准入海の後に形成された元、明時期の海岸線である。

天津の早期の集落は、比較的早く薊県の燕山南麓に現れた。薊県東城5里⁴の圉坊新石器時代の遺跡は、考古学上の発見において、天津で最も早い人類活動の遺跡である。宝坻県里自沽と天津市北郊区でも、石斧、石耜、石臼の棒などの石器が発見されており、5000年あまり前の完新世海進の時、天津平原は完全に海水に覆われていた、というわけではなく、人々はなおもここで活動していた、ということがわかる。薊県の張家、圉坊で、さらに商周時代の集落の遺跡が発見され、この二か所の地下に埋蔵されていた文物は形状や構造が基本的に同じで、遺跡の上層が西周文化であり、下層が商代文化である。天津の境界内で発見された三つの西漢の古城は、面積がいずれも一平方華里⁵前後で、早期の集落はすでに都市に発展していたことがわかる。隋朝が統一した後、南北を結ぶ大運河が開通し、南運河と北運河が合流する地点は「三会海口」と呼ばれ、おおよそ現在の金鋼橋のある三岔河口の場所であり、これは歴史上最も早く現れた天津の地名である。

3 天津の都市の形成と発展⁶

金朝の時期、天津は直沽寨と呼ばれていた。元朝が中国を統一した後、首都は大都（現在の北京）に設けられ、天津は国都の門戸となり、このことは天津の都市の形成に対して重要な作用を及ぼした。元朝至大二年（西暦1309年）、天津に「鎮守海口屯儲親軍都指揮使司」が設置され、至正五年（1345年）、さらに天津に「海津鎮撫司」が設置され、これより天津は軍事指揮機関の所在地となった。明朝の成立後、永楽2年（1404年）天津に衛が設けられ、その後さらに天津左衛と天津右衛が設けられ、天津は明朝三衛の軍事要地となった。⁷永楽三年（1405年）城壁が修築され、最初は土塼であったが、明弘治四年（1491年）土塼を煉瓦で囲み、積み上げて煉瓦塼にした。城壁は周囲「九里十三歩」⁸の長さ、高さが「三丈五尺」⁹で城門四つが設けられ、天津は正式に都市となった。当時、北城は政治、経済、文化の中心となり、北門外は賑やかな商業区であった。三衛衙門はすべて城内に設けられた。清順治九年（1652年）天津三衛を一つに合わせて天津衛となった。雍正三年（1725年）天津衛を改めて天津州となった。雍正九年（1731年）天津州を昇格して天津府となり、その下に天津、静海、青県、滄州、塩山、慶雲など六県一州を管轄し、これよ

り天津は、首都およびその周辺の防衛の要地となった。第二次アヘン戦争以後、天津の都市の重心は、徐々に旧城内から東南方向の海河沿岸に移っていった。光緒三十二年（1906年）までに、天津市区の人口は74,340戸、424,553人にまで発展し、その中で外国人は1,436戸、6,341人で、市区の建設面積も次第に拡大し、1918年までに、すでに開港前の6平方キロあまりから50平方キロあまりまでに発展し、当時、上海に次ぐ全国第二の大都市となった。

天津が普通の村落から発展して著名な都市になり得たのは、軍事的な地位の重要さが一要因であるが、さらに重要なのは、天津は地理的に大運河の北端に位置しており、交通の便がよく、また華北地区の海上の門戸であったことである。大規模な製塩の天然資源があったために、天津の都市の発展に良好な条件を提供した。

天津の最も早期の運河は、東漢建安十一年（西暦206年）曹操の主導で開拓された平虜渠、泉州渠、新河である。平虜渠は、南運河の青県から静海までの部分に相当する。泉州渠は、北は現在の蘆運河に合流し、南は現在の海河に接する。新河は、西は泉州渠の北端に始まり、東は現在の灤河に至る。隋大業四年（608年）隋の煬帝は、河北諸郡の160万あまりの人を派遣して、南は杭州に始まり、北は涿郡（現在の北京）に達する大運河を切り開いた。唐朝の頃、海運は大いに発達し、南方から海運で北方までもたらされる米、絹は、いずれも天津の港から陸揚げされた。元朝の頃、河運、海運の需要から、相次いで天津に「広通倉」、「直沽海運倉」、「接運庁」が設置された。当時、海運の終着点の波止場は、市内三岔口から旧城東門内の海河の西岸までであった。清朝の頃、毎年、運河によって北京に運ばれる食糧は400万石に達した。河運、海運の発展は、天津の官吏、動員の農民〔「民工」〕を増加させただけでなく、各地の商人を引き寄せ、商業貿易が次第に発展していった。

渤海湾の豊富な塩産は、天津の都市の興りと発展にも大いに有利であった。漢武帝の頃、現在の武清県一帯に塩官を設置し、塩の生産販売を管理した。後唐〔五代十国期〕の時に、蘆台に塩場を開設し、現在の宝坻県に塩倉が設置された。遼代には、現在の武清県に「榷塩院」が設置され、塩務を管理した。金朝が北方を統一した後、塩税は政府の全収入の首位を占めた。モンゴル太宗八年（1236年）、モンゴル・ハン国は三岔沽と大直沽塩使司を設立し、塩の生産販売を管理した。明代に天日製塩〔「晒塩」〕の技術が完全なものとなり、生産量も増大した。洪武二年（1369年）、長蘆鎮に「北平河間塩運使司」を設立し、のちに、さらに「河間長蘆都転運使司」と改められ、長蘆塩の名称はこれより始まった。当時、長蘆塩の税収は、毎年白銀1.2万両に達し、全国税収の

十分の一を占めた。清康熙十年（1677年）、清政府は長蘆塩管理機構を天津に移し、天津は次第に海塩運輸販売の中心となっていった。まさに軍事上の重要性と海運、河運および塩業の発展によって、天津は一漁村から次第に発展し、全国的な軍事上の重要都市、商業の中心および貿易港となった。

4 西洋資本主義の侵入¹⁰

アヘン戦争以前、西洋資本主義は中国の大門を開いて中国に侵入することを企てていた。北方では、彼らが最初に選んだのは天津であった。清雍正八年（1730年）、ロシア国大臣サワーは、艦隊を派遣してまず天津を占領し、北京を威圧するよう皇帝に提案した。乾隆五十八年（1793年）と嘉慶二十一年（1816年）、イギリスは二度にわたり使節団を派遣して、清政府と談判をして天津の開放を要求した。道光二十年（1840年）アヘン戦争の勃発後、イギリス軍艦はその年の8月に大沽口に到達し、海河を封鎖した。咸豊七年（1857年）、英仏侵略者は「アロー号事件」と「馬神甫事件」¹¹を口実として、ロシア、アメリカなどの国と結託して新たな中国侵略戦争を挑発したが、これは歴史上「第二次アヘン戦争」と呼ばれ、また「英仏連合軍戦争」とも呼ばれる。咸豊八年四月八日（1858年5月20日）、英仏連合軍は大沽口に侵入し、西岸の砲台を攻撃し、大沽を陥落させた。続いて侵略軍はまっすぐに天津に進撃し、望海楼一帯に駐屯した。清政府は恐れおののき、五月十六日（6月26日）イギリス、フランス、アメリカ、ロシアの四カ国と天津城南の海光寺において『天津条約』を締結した。咸豊九年五月（1859年6月）、イギリス、フランスなどの国は「批准書交換」の機に乗じ、再度大沽口を攻撃したが、成功しなかった。咸豊十年六月十八日（1860年7月30日）、イギリス、フランスはまたも大沽口へ進攻し、塘沽と大沽の砲台を陥落させ、その後侵略軍は海河に沿って天津城外の東浮橋まで至り、七月（8月）天津を占領し、八月（9月）北京を攻撃占領した。九月十一日（10月24日）、清政府はイギリス、フランス、ロシアなどの国に強いられて『北京条約』を締結し、これより天津は貿易港として開放された。侵入した各国はすぐに天津の分割を開始した。

5 太平天国の北伐¹²

外国資本主義の侵入と清王朝の反動統治は、中国の民族矛盾と階級矛盾を激化させた。中国人民は民族独立と民主権利を獲得するため、国内外の敵と英雄

的な闘争を展開した。清咸豊元年(1851年)、洪秀全は広西で農民起義を指導し、太平天国革命が勃発した。二年余りの時を経て、太平軍は中国南方を席卷し、咸豊三年(1853年)太平天国を建国し、南京に都を定めた。

太平天国は清王朝の統治を覆すために、咸豊三年四月(1853年5月)、林風祥、李開芳、吉文元ら数万の兵を率いた北伐を派遣した。北伐軍は揚州から出発し、安徽、河南を経て山西に入り、太行山を越えて直隸(現在の河北省)に入った。同年九月二十四日(10月26日)、北伐軍は泊頭に達し、二十七日(29日)、静海、独流、楊柳青を攻め落とし、北京を震撼させた。北伐軍の威信はとて高く、当時伝わっていた歌謡は次のように歌っている。「天下を争い、いくさを続け、貧乏人は何をも恐れず。楊柳青まで攻め上り、天子は驚きぶっ倒れ、天津衛まで攻め上れば、朝廷はすぐに帝位を譲る」。

北伐軍が天津近郊に進軍すると、清朝は恐れ慌てふためいた。咸豊帝は各路援軍を選抜派遣して天津に結集するよう命を出し、参賛大臣僧格林沁を派遣して天津に駐留させ統一指揮をとらせた。巡塩御史文謙と長蘆塩運使楊霈は「蘆團」を組織した。天津県知事謝子澄と大塩商張錦文は結託して、寄せ集めで「団練」を組織した。清軍は北伐軍の天津進攻を阻止するため、人民の死活をかえりみず、小稍直口で南運河の堤防を決壊させて河の水を溢れ出させ、天津城西を水浸しにした。

九月二十八日(10月30日)、北伐軍の先鋒は天津西郊の汪庄子と大稍直口一帯まで挺進し、当地の人民の熱烈な歓迎を受け、男は水運び、柴運びを手伝い、草を刈り馬に餌を与えた。女は裁縫や食事の用意を手伝い、負傷者の世話をした。ある青年はさらに太平軍に参加した。この時、長蘆塩運使楊霈、天津総兵特克慎と天津知事謝子澄は兵を率いて抵抗し、双方とも激しい戦闘をおこなった。北伐軍は武器が立ち遅れたもので、加えて北方の気候に不慣れで、戦闘は挫折し、「開山王」以下将兵500人余りが犠牲になった。太平天国はついに天津攻撃をしばらく放棄することを決定し、楊柳青、独流、静海一帯まで退いて休息した。

咸豊三年(1853年)末、北伐軍は二度目の独流攻撃で、清軍を湿地に包囲し、清軍副都統佟鑑と天津知事謝子澄を射殺し、大勝利を得た。太平軍のこの英雄的戦闘の物語は、今日に至ってもなお天津人民の中に広く伝わっている。

太平天国北伐軍は戦略上、孤軍深入し、援軍もまた清軍によって途中で阻止された。北伐軍は何度も英雄的な激烈な戦闘を経たが、兵力は大いに消耗し、ついに咸豊五年(1855年)直隸連鎮と山東馮官屯まで転戦した時、清軍によって分割包囲され、包囲突破も成功せず、すべて壮烈な犠牲となった。

太平天国北伐軍は失敗したが、彼らの直接天津に迫る戦闘は、清王朝の統治に深刻な打撃を与え、天津人民の反抗闘争を大いに鼓舞した。彼らの英雄的で頑強な革命精神と厳格な軍紀は、天津人民に良好な印象を残した。

6 大沽口防衛戦¹³

第二次アヘン戦争中、イギリス、フランス、アメリカ、ロシアの四カ国は三度天津に侵入した。咸豊八年(1858年)、英仏連合軍は天津を侵略占領した後、清朝に迫り城南の海光寺において個別にイギリス、フランス、アメリカ、ロシアと『天津条約』を締結した。『天津条約』はまさにマルクスが指摘したように、「徹頭徹尾中国を凌辱するものであった」。しかし、侵略者は『条約』は天津を貿易港に開港できておらず、それは彼らの失敗であると考えた。そこでさらに咸豊九年(1859年)、北京での『天津条約』批准書交換に乗じて、再度中国侵略戦争を発動した。近代天津史上有名な「大沽口防衛戦」はこの年に起こったのである。

咸豊九年五月十七日(1859年6月17日)、イギリス侵略軍指令ホープは英軍艦20艘、仏軍艦2艘を率いて大沽口外まで至り、河を堰き止める鉄柱4本を引き倒して挑発を行なった。二十日(6月20日)、英国公使ブルース、仏公使ブルブロンが大沽に到着した。英仏侵略軍は清軍に河堰の鉄柱筏を撤去するよう要求し、「もし撤去しなければ、船の航行のために、こちらから撤去する」と声明した。清朝は彼らに北塘から北京に入り批准書交換するよう言ったが、英仏侵略者は傲慢にも「戦闘を継続し、北塘には行かない」と叫んだ。二十一日(6月21日)、ホープは不条理にも大沽口防衛軍に「河堰の鉄柱などを撤去せよ、撤去しなければ、当提督自から兵を出して抜き取る」と要求した。五月二十五日(6月25日)、英仏侵略軍は軽率にも大沽防衛軍に対して進攻した。ホープ自ら軍艦10艘を率いて大沽口に並べ、彼はまず汽船で鉄柱を引き、続けざまに十数本引き倒し、さらに天津道が制止のために送りつけた覚書を拒絶した。午後2時、汽船を砲台防護の鉄鎖に直接ぶつけ、ただちに砲台に向けて砲撃した。このとき、砲台防衛の清軍愛国将兵は忍ぶに耐えず、反撃を余儀なくされた。「各陣地の大砲は重ねて反撃し、外国船の多くを撃破した」、「さらに舢板はしけ〔小仙板船〕二十隻余りが河いっぱいに進んだ」。大沽口防衛戦では、合計すると沈めた英仏軍艦3隻、大破3隻、死傷した侵略軍400余人で、ホープも重傷を負った。ブルブロンは事件後にフランス外交大臣に書き送った書簡の中で次のように言っている。「中国人は標的射撃と大砲操作の面では、訓練を

受けて素質があるヨーロッパの軍隊とすでに十分に肩を並べている。」

砲台を防衛する清軍が侵略者と勇敢に戦っている時、大沽地区の民衆は、砲火の危険を冒して食物を兵営まで運び、砲台防衛の清軍に大きな支持と励ましを送った。

この大沽口防衛戦の重大な勝利は、1840年のアヘン戦争以来、清軍の外国侵略者への抵抗反撃の戦闘の中で勝ち取られた最初の勝利であり、第二次アヘン戦争中、唯一の勝ち戦であった。それは中国人の崇高な民族の気骨と愛国主義精神を体現しており、近代中国人民の反侵略闘争史上、記念に値する大事である。

7 租界¹⁴

咸豊十年(1860年)、天津が開港を強いられた後、イギリス、フランス、アメリカ、ロシア、ドイツ、日本、イタリア、ベルギー、オーストリアなどの9カ国が前後して天津において租界を奪い取った。租界の総占領地は23350.5¹⁵畝で、当時の天津旧城区の7.9倍に相当する。

最初に天津に租界を設立したのはイギリスである。咸豊十年十一月(1860年12月)中国駐在のイギリス公使ブルースは、『北京条約』などのイギリス居留民の通商港における土地家屋の借用許可に関する規定(租界の設立は規定していない)に基づき、直隸総督恒福、三口通商大臣崇厚に照会し、理不尽にも天津城東南の海河西岸の紫竹林一帯をイギリス租界に画定することを要求した。イギリス租界の画定後、さらに三度の拡張を経た。租界の四方は、東は海河を臨み、南は馬場道に沿って佟楼に至る。西は海光寺大道(現在の西康路)まで。北は宝土徒道(現在の営口道)に沿ってフランス租界と境を接する。

二番目に天津に租界を設立したのはアメリカである。咸豊十年(1860年)イギリスが天津に租界を設立したのと同時に、アメリカも例によって強制占領し租界とした。その四方は、東は海河を臨み、南は開灤胡同(現在の開封道の東の部分)に至る。西は海大道(現在の営口道から開封道までの部分の大沽路)に至る。北はイギリス租界の博目哩道(現在の彰徳道)に接する。アメリカは天津に租界を設置してから後、国内の政局が動揺したため、租界に対して始終実際の管理を行なうことができず、光緒二十八年(1902年)アメリカはイギリスと密かに受け渡しを行い、アメリカ租界をイギリス租界に併合した。

続いて、フランスも天津に租界を設置した。咸豊十一年四月二十四日(1861年6月2日)、フランス政府と清政府は『天津紫竹林フランス租界地條款』を締

結し、フランス租界を画定し、のちにさらに二度の拡張を経た。フランス租界の四方は、東北は海河を臨み、南は宝土徒道（現在の營口道）に沿ってイギリス租界と境を接する。西は小埵（現在の新興路）まで。北は秋山街（現在の錦州道）に沿って日本租界と境を接する。

光緒二十一年九月十三日（1895年10月30日）、天津駐在ドイツ領事スーゲンと天津河間道任之驛、天津海関道李岷琛は天津において『天津条約ドイツ租界協定』を締結し、ドイツ租界を画定し、拡張を経た後、その四方は、東は海河を臨み、南は小劉庄の北沿小路（現在の瓊州道）から海大道に至り、南に向かって東樓村を経て徳堂磚窑（現在の圍堤道附近）に至る。西は馬場道から李家公園（現在の人民公園）西壁に沿って、西樓村を経て崇徳堂磚窑に至る。北は馬場道に沿ってイギリス租界と境を接する。

光緒二十二年九月（1896年10月）、中日両国政府は北京において『貿易港日本租界専条』を締結したが、これに基づき、日本は天津での租界の設置を提起した。光緒二十四年七月十三日（1898年8月29日）、天津駐在日本領事鄭永昌と天津海関道李岷琛、天津河間道任之驛は『天津日本租界條款』および『另立文凭』を締結した。同年九月二十一日（11月4日）さらに『天津日本租界続立條款』および『続立文凭』を締結し、日本租界と予備租界の範囲および関係の事項を規定した。その後さらに二度の拡張を経て、その四方は、東は海河を臨み、東南は秋山街（現在の錦州道）に沿ってフランス租界と境を接する。南は墻子河（現在の南京路）までで、河に沿って西に向かう。北は閘口から旭街（現在の和平路）に沿って南に向かい、福島街（現在の多倫道）に至り西に曲がり、まっすぐに南門外大街に至る。

ロシア租界は光緒二十六年（1900年）八カ国連合軍の侵入後に強引に占領したものである。まず占領し、その後光緒二十六年十一月二十八日（1900年12月30日）、清政府に彼らと『天津租界條款』を締結するよう強要した。翌年四月（5月）、天津駐在ロシア領事ボーペイと天津河間道張蓮芬、直隸候補道錢鏞は協定を締結し、正式に租界の範囲が画定した。その四方は、東北は鉄道の駅から京榆鉄道に沿って東に向かい、南は大直沽まで。西は海河を臨み、西北は意俄交界路（現在の五経路）に沿ってイタリア租界と境を接し、東に向かって曲がり鉄道の駅まで。

光緒二十八年五月二日（1902年6月7日）、イタリア公使ガーリナーと天津海関道唐紹儀は天津において『天津イタリア租界章程契約』を締結し、正式にイタリア租界として画定された。その四方は、東北は興隆街から京榆鉄道に沿ってロシア租界まで、南は海河を臨み、西北は意奥交界路（現在の北安道）に

沿って興隆街までである。

光緒二十六年(1900年)八カ国連合軍が中国に侵入した時、ベルギーは出兵参戦しなかったが、天津に租界を設置する要求をした。光緒二十七年十二月二十八日(1902年2月6日)、天津駐在ベルギー領事ガートスと天津河間道張蓮芬、直隸候補道錢鏞は、天津において『天津ベルギー租界契約』を締結し、正式にベルギー租界として画定された。その四方は、東は大直沽村を横断し、南は小孫庄までである。西は海河を臨み、北はロシア租界(現在の十五経路)と境を接する。

八カ国連合軍の侵入後、オーストリア=ハンガリー帝国侵略軍は海河以東の地区を占領した。光緒二十九年(1903年6月)天津駐在のオーストリア副領事ベイナールと天津海関道唐紹儀らは、天津において『天津オーストリア租界章程契約』を締結し、正式にオーストリア租界として画定された。その四方は、東は十字街が新貨廠大街と接する地点からである。東南は意奥交界路(現在の北安道)に沿ってイタリア租界と境を接する。西は海河を臨み、北は金鐘河(現在の獅子林大街)までである。

ここに至り、天津はバラバラに分割され、人民は主権喪失の恥辱を受けることとなった。9ヶ国租界は1917年から1945年までに陸続と回収された。

8 解放前の外国居留民¹⁶

清咸豊十年(1860年)天津の開港以前、天津の外国居留民は、宣教師、商人を含めても20人に満たなかった。開港後、帝国主義の侵入および各国が天津に租界を設置するに伴い、天津の外国居留民の人口は次第に増加した。光緒十六年(1890年)、天津在住の外国居留民はすでに620人となり、宣統二年(1910年)急に6304人にまで増加した。その後、天津外国居留民の総数は毎年上昇し、1945年までに101502人にまで急増し、開港前の50751倍となった。しかし1946年から年を追って減少に転じ、この年は5400人に急減少した。1947年には4624人にまで下がった。天津の解放初には、なおも3550人の外国居留民がいた。

9 天津教案¹⁷

清同治八年(1869年)、フランスは三岔河口の望海楼跡地にカトリック教会を建設した。宣教師シェフォーインは、「これは聖母の仁慈と戦争(第二次アヘン戦争を指す)の勝利の結果である」と揚言し、教会に「聖母の勝利の後

堂」と命名した。天津人はこれを「望海楼教会」、「河楼教会」と呼び、またある者はこれを「鬼子楼」と呼んだ。

教会を建設する際、フランスは「永祖」¹⁸許可証の規定に従わないで、もっぱら「カトリック教会建設の必要」とし、さらにフランス領事館もこの地に建設した。そして宣教師と領事はともに結託して天津人民を侵害する活動をおこなった。

教会の建設後、シェフォーインは「伝道をおこなう場所は静粛でなければならない」ということを口実にして、無理やり付近の露天商を追い払った。やがてまた地方役人と結託して、周囲の民家を力づくで占領して解体し、多くの住民が路頭に迷うこととなった。外国人宣教師はさらにこの土地のやくざ者たちを集めて入教させ、彼らの手先とした。彼らは「カトリック仁慈」の表看板を掲げて、小洋貨街に「仁慈堂」を開設した。¹⁹人々が子供を「仁慈堂」に預けたがらないと、宣教師は買収したり、ゴロツキたちに至るところで児童を誘拐させたので、天津の人心は戦々恐々としていた。

同治九年（1870年）の春から夏にかけて、「仁慈堂」の児童虐殺事件が次々と人々によって発見された。天津県衙門が逮捕した誘拐犯も教会の罪悪行為を供述した。官府は誘拐犯に対し深く追及しようとはせず、犯罪人を処刑するだけで、いいかげんに事件を終わらせようとした。これに対し、天津の世論は騒然となり、「郷紳は孔子廟で集会し、書院は授業を停め」、抗議を示した。

五月二十日（6月18日）、民衆は自ら武蘭珍、安三の二名の誘拐犯を捕らえ、県衙門に突き出して処罰を要求した。五月二十三日（6月21日）、民衆の呼びかけのもと、天津知県劉傑は犯人を連れて教会に事情聴取にゆき、多くの群集もその後に続いた。このとき教会はやくざ者に棍棒で群集を殴打させ、憤激した人々は教会の入口の窓を破壊した。天津駐在のフランス領事フォンタニエは銃を持って劉傑を威嚇し、彼に群集を鎮圧させようとした。劉傑が拒絶すると、フォンタニエは銃を向けて発砲し、劉傑に随行していた高昇を傷つけた。フランス侵略者の罪悪行為に周囲の民衆は激怒した。彼らは一斉に立ち上がり、その場で豊大業と彼の秘書シモンを殴り殺した。続いて、群集は教会になだれ込み、さんざん悪事を働いた宣教師シェフォーインを射殺し、望海楼教会とフランス領事館に放火してこれを焼いた。その後、群集はさらに小洋貨街に向かい、「仁慈堂」に放火して焼き払った。これが中国近代史上有名な「天津教案」である。

教案の発生後、フランス、イギリス、アメリカ、ロシア、プロシア、ベルギー、イタリアの7カ国は、五月二十六日（6月24日）に共同で清政府に対し

て「抗議」を提出し、陸続と軍艦を大沽口外まで集結させ、軍事的恫喝をおこなった。五月二十五日(6月23日)、清朝は直隸総督曾國藩を天津に派遣して「査察」をおこなわせた。フランス、イギリスは、教会の賠償と修理、「犯人」の処罰、天津府、県の役人の命で償う、などの理不尽な要求を提示した。曾國藩は役人の命で償うという一条を除いて、その他の要求はすべて応じた。彼は一方でほしいままに無辜の民衆を捕らえ、一方で人を派遣して教会と領事館を修理し、フォンタニエを手厚く葬った。曾國藩の売国的な罪行は天津人民の大きな憤激を引き起こし、ある者は彼が貼った告示に一本の長い麻縄を打ち付け、彼は外国人のために白装束で喪に服する孝行者だと皮肉った。曾國藩のこの恥知らずの売国的な知らせが北京に伝わると、北京在住の湖南人は彼を湖南同郷会から除名し、彼が書いた「湖南会館」の扁額を破壊した。清朝は五月三十日(6月28日)崇厚を欽差大臣に任命し、「謝罪」のためフランスに行かせた。八月三日(8月29日)、李鴻章を直隸総督に任命し、引き続きこの案件の査察をおこなわせた。九月十一日(10月5日)、清朝は天津知府張光藻、天津知県劉傑を黒龍江に流刑にした。九月二十五日(10月19日)、天津の16名の愛国義士を殺害し、白銀50万両の賠償金を支払った。

清朝は外国人を恐れたが、天津人民は決して屈することはなかった。まもなく「望海楼炎上」[「火烧望海楼」]の版画と殺害された愛国義士を讃える詩が民衆の間に伝わり、天津人民が引き続き反抗闘争をおこなうのを鼓舞した。

10 天津のプロレタリアートとブルジョアジーの誕生²⁰

天津近代プロレタリアートの誕生は、ブルジョアジーの誕生よりも二、三十年早い。咸豊十年(1860年)天津は開かれて対外貿易港となった後、外国洋行[外国商社の支店]は内地の特産品略奪の便宜のために、天津にいくつかの梱包工場と農業副産物加工工場を設立し、加工をした後に輸出できるようにした。これらの工場の機械設備は多くなく、雇用した労働者の大半は手作業で操作をしていた。その後、外国資本家はさらに天津に陸続と一群の企業、例えば法国電灯房、仁証洋行洗毛廠、起士林食品加工廠などを開設した。これらの企業の規模は大きくはなかったが、天津の最も早期のプロレタリアートはここから誕生した。つまり、近代天津プロレタリアートは外国資本の侵入とともに誕生したのである。十九世紀の60年代から、天津は次第に北方洋務運動の基地へと発展していった。全国的に有名ないくつかの大型工鉦企業が前後して天津に建設された。例えば天津機器局は、最盛期には西局(海光寺)に約700名の労働者

がおり、東局には1000人近くがいた。²¹北洋水師大沽船塢〔「船塢」は「ドック」の意〕は、最多時には600人余りに達した。天津電報局と鉄路公司にも一群の産業労働者がいた。直隸開平炭鉱は光緒四年（1878年）には3500から4500人の労働者がいた。民族資本企業に至っては、一般に規模が小さく、天津自来火会社が雇用する労働者は比較的多かったが、それでも400人足らずであった。統計によると、光緒二十年（1894年）の日清戦争以前は、全国工鉱企業の近代産業労働者の総数は10万人足らずで、天津はすでに8000人前後で、全国労働者総数のおよそ8%前後を占めていた。

天津のブルジョアジーの誕生はプロレタリアートよりも遅く、近代民族工業の勃興とともに誕生した。天津の最初の近代民族資本企業は輪船招商局総裁朱其昂が光緒四年（1878年）に開設した「胎來牟機器磨房」で、場所は紫竹林招商局の隣であった。たしかに規模は小さいが、生産能力は家内作業の製粉よりも大いに向上し、さらに挽いた粉の色は清浄で、そのため遠くまでその名を馳せ、大いに利益を得た。その後、光緒十年（1884年）広東三水の人羅三佑は小白楼附近に「徳泰」鉄工廠を開設した。光緒十二年（1886年）天津武備学堂の総裁楊宗濂（偽名楊鼎祺）は、イギリス匯豊銀行買弁の吳調卿と共同で資金を集め、紫竹林の郊外六里あまりの賀家口に「天津自来火（マッチ）公司」を開設した。光緒二十三年（1897年）と光緒二十五年（1899年）、広東道（現在の唐山道）に「天津硝皮廠」〔「硝皮」は「硫酸ソーダ」の意〕などを開設した。これらの民族工商企業の創始者は、ある者はたしかに官僚買弁の色彩を持っていたが、畢竟、天津における最も早期のブルジョアジーの代表的人物であった。

11 まとめ

以上、2～10章において『全書』の記述を訳出したが、ここでは『天津史』『近代』の内容を参照し、いくつかの点を補足してみる。

まず、清代の天津の行政機構について。「直隸総督」の下に「布政使」（財政、戸口）、「按察使」（司法）、「提学使」（教育）、「長蘆塩運使」（塩務）、「海関道」（通商、海防など）、「天津道」があり、「天津道」の下に「天津知府」「天津知県」があった。²²

太平天国北伐軍との戦闘における「蘆團」「團練」について、『近代』は次のように述べている。

咸豊三年（一八五三年）、迫りつつある太平天国軍に対処するため、防備を固めることが必要になった。長蘆塩運使楊需が中心となって「壮勇」を招募し「蘆団」を編成した。また前浙江巡撫梁宝常・前湖南彬州知州呉士俊・前良郷県教諭汪彭らが、地方官と協議して団練を編成した。²³

またこの年の洪水について、次のように述べている。

天津城が守られたのは、防備の努力に加えて偶然の条件も大きな意味を持っていた。八月一日夜、大雨のために堤防が決壊し、天津城の南は水びたしになっており、はからずも天然の障害物として利用できたからである。²⁴

「天津教案」について、『近代』は、崇厚の上奏文にもとづいて、その概略を述べている。

同治九年は天候が不順であった。天津府では日照りのため、種まきが五月十七日の雨まで不可能になっているほどだった。この日照りゆえ人心が不安定になったためか、天津には奇妙な流言が広まった。つまり、薬を使って幼児を迷わせ連れ去った者がいるとか、^{ぎちよう}義塚（慈善としての公共墓地）に子供の死体が捨てられているとか、その死体は教会が捨てたものであるとかいうものである。果ては、カトリック教徒が目をくりぬき胸をさいたのだと言う者まであったが、証拠はなかった。また、幼児誘拐犯二名が官に捕らえられ、処刑されるということは実際にあったので、流言はますます盛んになった。遂に、犯人と疑われた教会関係者を、民間で捕らえて官につきだすということまで起こった。そのようにしてつきだされたひとり武蘭珍は、教会の王三という者と関係があると供述したため、民間の世論は沸騰した。そこで、道台周家勳も捨てて置けなくなり、フランス領事フォンタニエに相談した上で、知府張光藻・知県劉傑とともに武蘭珍を教会に連行して調査したものの、はっきりとしたことは不明のまま引き上げたのであった。その後、様子を見にやってきたやじ馬と教会の者とが喧嘩を始めると、武官が派遣されて事を取めた。ところが、フォンタニエはただならぬ形相で崇厚の衙門に現れ、崇厚の眼前で銃を撃ったのである。その後フォンタニエは、崇厚が「人々は興奮しており街には火消しの者が、かなり集まっている」と言って止めるのもきかずに、「中国の連中がこわいものか」と言って建物から出て行った。フォンタニエは途中、教会から帰りがけの知県に出会い、またしても銃

を撃ったので、周りの群集は激昂して、フォンタニエを殴り殺してしまった。誰かが鳴らした銅鑼の音を聞いて集まった人々は、大聖堂・仁慈堂などを襲撃し、中国人・外国人を含めて多数のカトリック教徒が殺害されるという惨事に至ったのである。²⁵

また、孤児の収容などの社会福祉を「義拳」という概念でとらえ、次のように述べている。

天津教案の発端は、仁慈堂をめぐる流言にあった。とはいえ、このような慈善事業そのものは、必ずしも天津の人々にとって目新しいものではなかった。なぜなら、カトリック到来以前から、天津には地元有力者による同種の活動が存在していたからである。貧しい者が道端に子女を捨てたのを収容することを目的として、「恤孤会(じゅつこかい)」が立てられていた。²⁶

…、事件の全体的文脈を勘定するならば、暴動を単に、ならず者の行動である、または、住民の一時的な怒りによる暴発であるとみるのは不十分であり、在来の「義拳」とカトリックの慈善事業との競合・対抗という構図の中で発生した事件であったと考えるべきである。²⁷

事件で殺害された人数について、『天津史』は「三～四十人の中国人、一〇人の修道女、二人の神父が殺されたあげく、教会も領事館とともに焼かれた」としている。²⁸

以上、『天津全書』中の歴史に関する記述より、洋務運動の時期までの内容を見てきた。引き続き、同書の「義和団運動」以降の内容を翻訳し、見てゆきたいと思う。

謝辞

本稿の地質学に関する用語については、島津光夫元県立新潟女子短期大学学長の御教示を得た。ロシアの人名については、新潟県立大学柳町裕子准教授、李丹寧客員准教授の御教示を得た。ここに感謝の意を表する次第です。

注

- 1 『全書』「前言」
- 2 原文「天津成陸及早期聚落」。『全書』15-16頁。
- 3 原文「大理氷期」。ウルム氷河期ともいう。雲南省大理県の点蒼山海拔3000メートル以上に分布している氷河に由来する。地質鉱産部辞典辦公室編『地質辞典』(地質出版社、1985)、140-141頁。
- 4 中国の「里」(華里)は500メートル。5里は2,5キロメートル。
- 5 25万平方メートル。
- 6 原文「天津都市的形成和發展」。『全書』16頁。
- 7 「衛」は明代に要衝に置かれた兵營。
- 8 「歩」は5尺、すなわち1,65メートル。「九里十三歩」は約4521メートル。
- 9 「丈」は3,3メートル、「尺」は0,33メートル。「三丈五尺」は約11,5メートル。
- 10 原文「西方資本主義的入侵」。『全書』16-17頁。
- 11 1856年2月、広西省西林でフランス人宣教師オーギュスト=シャブドレーヌが地方官憲に殺害された事件。「西林教案」ともいう。姫田光義ほか著『中国近現代史』上巻(東京大学出版会、1982年)36頁。
- 12 原文「太平天国北伐」。『全書』25頁。
- 13 原文「大沽口保衛戦」。『全書』25頁。
- 14 原文「租界」。『全書』17-18頁。
- 15 1畝は6,667アール。
- 16 原文「解放前的外国僑民」。『全書』20頁。
- 17 原文「天津教案」。『全書』26頁。
- 18 永代借地すること。
- 19 「仁慈堂」はカトリック教会のシスターの宿舎で、また社会福祉施設でもあり、「孤児の収容や診察・施薬などをおこなっていた」という。『近代』68頁。
- 20 原文「天津無産階級和資産階級的産生」。『全書』21-22頁。
- 21 「天津機器局」の労働者数について、『天津史』は「工場は、当初たった五〇人の労働者とひとりの外国人技術者ではじまったが、その後千二百人の中国人労働者を雇うまでの規模となり、かれらはみな精巧な外国製の装置を使いこなせるようになった」としている。『天津史』36頁。
- 22 『天津史』15頁。
- 23 『近代』43頁。
- 24 『近代』43-44頁。
- 25 『近代』69-70頁。
- 26 『近代』80頁。
- 27 『近代』81-82頁。
- 28 『天津史』237頁。